

特集

※上の写真にあるP箱(プラスチック製ケース)は、リターナブルびんが繰り返し使えるよう運ぶ際に保護する容器で、重要な役割を果たしています。

強く求められるびんリユースの進展

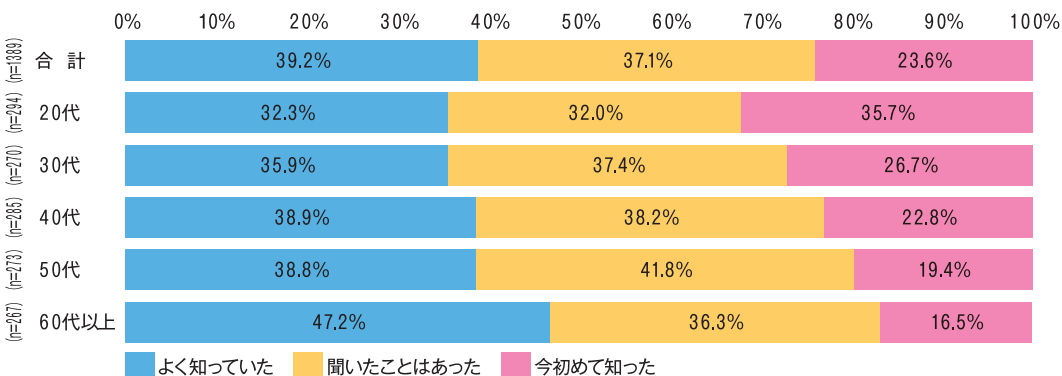
びんリユースシステムの維持と新たなシステムの構築には、
国・自治体・消費者・事業者などの連携と協力が不可欠！
ガラスびんだからこそできるリユースの進展が強く求められています。

高齢になるほどリユースびんの認知度が高い。
環境上のメリットがびん入り商品への関心を高める。

びんリユースの進展が強く求められる中、当協議会が参画する環境省の「我が国におけるびんリユースシステムの在り方に関する検討会」が、1389人の消費者を対象としたインターネットによる「リユースびんに関する消費者意識アンケート調査」を実施。今年3月に開催された第14回の検討会で報告しました。

その結果、ガラスびんにはリユースびんとワンウェイびんがあることを知っていると回答した人は39.2%で、高齢になるほど認知度が高くなっています。また「ガラスびんは環境によい」という情報を消費者に提示すると、提示前と比べて「びんに関する情報に触れる機会」や「びん入り商品を探す行動」があったとの回答が増加。ガラスびんに対する関心度が高まり、具体的な行動に繋がった可能性が認められました。

■リユースびんの認知度



当協議会ウェブサイトで「びんリユースの取り組み」を紹介。
新たにびんリユースを紹介する小学生用パンフレットも制作。

平成28年度の当協議会の事業計画におけるReuse対策では、①地域や市場特性に合わせたガラスびんリユースシステムの維持、②「リターナブルびんポータルサイト」の鮮度維持と全国各地域での取り組みほか情報発信強化、③「びんリユース推進全国協議会」での十分な合意形成によるびんリユースの推進、④関係他団体と連携したガラスびんリユース推進に向けた課題整理と対応策の検討・実行を掲げています。

びんリユースの広報活動では、昨年よりウェブサイトにおいて、新たに「びんリユースの取り組み」のページを設け、地域の実証事業の紹介や自治体の取り組みを紹介しています。また「エコプロ2016」ではびんリユースをテーマに展示を実施。イベントで配布するびんリユースの小学生用パンフレットも制作しました。



▲びんリユース小学生用パンフレット

びんリユースの取り組み事例

岡山賢人プロジェクト

県産原料のリユースびん入り飲料を2タイプ開発し、「カーボンフットプリント」によりリユースの効果を表示。

岡山賢人プロジェクトでは、岡山大学の松井 康弘准教授を中心に岡山県内で 3R を推進する活動を展開する中、環境省の平成25年度「びんリユースシステム構築に向けた実証事業」の採択を受け、リユースびん入り飲料「晴・Re・茶」を開発しました。引き続き平成26年度の同事業において、前年度に培った製造・流通のノウハウを活かしてリユースびん入り飲料「OKAYAMA PEACH CIDER岡山県産清水白桃」を開発。デパートやホテル、JRの土産物店などで販売しています。

いずれの商品についても、リユースの認知度を向上させることを目的に、温室効果ガスの排出量を CO₂ に換算して「見える化」する「カーボンフットプリント」の認証を取得し、リユースの効果を分かりやすく数値でびんに表示しました。これはガラスびんでは日本で初めての試みです。



▲OKAYAMA PEACH CIDER岡山県産清水白桃」チラシ

概要

環境教育・ESDに焦点を当て、行政機関・企業・大学・地域商店街・市民団体等、産官学民の関係者と連携し、学術的・組織的基盤を構築し、岡山県・岡山市在住の市民の環境行動を推進。

びんリユースは3Rの全体の取り組みの入り口。エコマネーで消費者が3Rを体験できる仕掛けを作りたい。

岡山賢人プロジェクトでは、これまで2年にわたり「びんリユースシステム構築に向けた実証事業」において、びんリユースの取り組みを展開してきましたが、これはリデュース・リユース・リサイクルの3R全体の取り組みの入り口として捉えています。

これまでに岡場で展開してきた3R/4R(リフューズ・リデュース・リユース・リサイクル)の体験イベントでは、イベント参加者がリユースびん返却などのエコ体験を好意的に受け止めており、こうした体験が環境行動に取り組みきっかけとなる可能性が見えてきました。

今後は、環境にやさしい3R行動を実施すればポイント還元される「エコマネー」などの仕掛けを通じて、消費者の3R行動を動機づけ、その習慣化を図ってきたいと考えています。



▲観光列車での車内販売

日本酒造組合中央会

一升びんのリユースシステム維持に向けて、「1.8ℓびんの再使用率向上策の調査研究」を実施。

一升びんは、容器包装リサイクル法第18条で規定する自主回収認定容器として認定されていますが、その認定基準である「回収率おおむね90%」に対し※現状の回収率が80%強であり、びんの再使用の実態から判断して、回収率おおむね90%の達成が難しくなっています。日本酒造組合中央会では、このような状況を踏まえ、一升びんのリユースシステム維持に向けた取り組みのために、平成26年度に「1.8ℓびんの再使用率向上策の調査研究」を実施しました。

消費者、清酒・本格焼酎メーカー、びん商、P箱レンタル協議会などを対象にアンケートやヒアリング調査を実施した結果、一升びんの再使用を阻害する主な要因として、一升びんの回収量の低下、一升びんの需要減少、回収びんに対するメーカーの品質要求アップ、剥がれにくいラベルによる洗びんコスト増や回収びんの品質低下、地域的なP箱不足などが挙げられました。

※「現状の回収率が80%以上であり、その回収の方法から判断して、おおむね90%の回収率を達成するために適切なものであると認められた場合」を含む。

一升びんのリユースシステム維持に向けて、「1.8ℓびんの再使用率向上策の調査研究」を実施。

日本酒造組合中央会では、今回の調査結果を踏まえて具体的に取るべき方策として、地域ごとの一升びんの実態を把握、一升びんの自治体回収等の実態把握、酒造メーカーに対する啓発や情報提供の強化、関係主体が集まって具体的な方策を議論する場(ステークホルダー会議)の設置、回収びんの品質基準の検討、自治体に対する情報提供と先進事例の情報発信などを挙げています。

一升びんのルートは、びんリユースを維持していく上で非常に大切なもので、持続可能にしなければなりません。現在、さまざまな課題を克服し、一升びんの回収率・再使用率を上げていくために、業界を挙げて取り組みが進められている状況です。

日本酒造組合中央会では、引き続き一升びんのリユースシステム維持に向け、再使用率向上のための具体的な施策等について調査研究を行っています。



▲一升びん(1.8ℓびん)

概要(平成28年6月)

- 会員数：47 都道府県単位の酒造組合(40) 酒造組合連合会(7)
- 組合員数1,754 清酒(1,467) 単式蒸留焼酎(274) 米りん二種(13)



東京飲料株式会社

昭和4年創業の東京飲料株式会社では、18種類のリターナブルびん入り飲料を製造・販売。

東京飲料株式会社は、東京都中野区で昭和4年よりラムネやサイダーなどの製造・販売を営んできました。創業当時は砂糖が高価な時代で、砂糖を使った飲料はなかなか庶民の口に入ることはなかったとのこと。もちろん容器はすべてリターナブルびんで、大切に洗って繰り返し使われていました。

現在、主力商品となっているレモンサワーやライムサワーなどの各種焼酎割飲料は、今から35年ほど前に大ヒットした焼酎割飲料「ハイサワー」に追随して製造を始めたもので、透明とグリーンの200ml共通びんに入れて展開。びんはリユースしています。さらに昔ながらの口部がガラスのラムネびんも、大切に繰り返し使っています。出荷先は、都内、関東近辺の酒問屋や商店・業務店で納入先は決まっており、リターナブルびんの扱いを熟知しているため、びんの回収率は90%以上となっています。



▲東京飲料株式会社のリターナブル瓶入り飲料

概要（平成28年10月）

- 従業員数8名（工場勤務4名・配送業務2名・事務1名・会長職1名）
- ラムネ・お茶・焼酎割り飲料・清涼飲料飲料水の製造および配送

キリングroup本社の中野移転を記念して、ご当地ドリンク「ナカボール」でコラボレーション。

平成25年4月にキリングroupの本社が中野に移転することを記念して、その1年ほど前から東京飲料株式会社とのコラボレーション商品の企画が進められました。当初は「サイダーとウォッカで中野らしいカクテルを作りたい」ということでしたが、紆余曲折があり、キリン・デジオ社のウイスキー「ジョニーウォーカー」をショウガの香りとカプサイシンの刺激がある濃いオレンジ色が特徴の炭酸飲料「ハイ辛」で割ったカクテル「ナカボール」が誕生しました。まさに刺激的な中野らしいカクテルで、現在200店を目標に取り扱い店を増やしています。お店ではできあがったカクテルが提供されるため、「ハイ辛」のびんを目にするのは少ないが、グリーンのリターナブルびんに入っています。

長年リターナブルびんを使い続けている東京飲料株式会社の寺田社長は、レトロな魅力があつて環境にも優しいリターナブルびんに入った商品を取り扱うお店が増えていくことを願っています。



▲中野のご当地ドリンク「ナカボール」



全国びん商連合会
会長 吉川康彦氏

リターナブルびんの認知度をアップさせ、びんリユースの仕組みを広めたい！

びんリユース推進の土台となるネットワークが構築されつつあり期待しています。

びんリユースの現状は、決して好ましいものではありません。しかしながら、平成25年に見直された環境省の「第三次循環型社会形成推進基本計画」において、リターナブルびんの重要性が明記されたことにより、この国の方向性がびんリユース推進に向かっているということが伝わり、とても嬉しく思っています。

また「びんリユース推進全国協議会」が設立され、さらに全国7か所にびんリユースの地域協議会が設立されたことなどにより、びんリユース推進の土台となるネットワークが構築されつつあり、今後の取り組みに非常に期待しております。地域により、できることとできないことがあると思いますが、小さなことから少しずつ取り組んで、継続していくことが大切だと思います。それぞれが独自の取り組みを実践することにより、それが話題となりびんリユースのアピールにつながっていきます。

新しいリターナブルびん「RDロップス」を使った大和茶「と、わ」、大阪煎茶「茶々」や「OKAYAMA PEACH CIDER岡山県産清水白桃」などは、若い人たちにも受け入れられ、リターナブルびんの認知度アップに貢献していると思います。

自治体のリターナブルびん収集にも期待するが、昔ながらの酒販店に返す仕組みを取り戻してほしい！

リターナブルびんを分別収集している自治体やびんの分別収集からリターナブルびんを抜き取っている自治体が、全国にかなりあるようですが、リターナブルびんの品質に対する配慮が強く求められ、その仕組みを整えることが必要だと思っています。また、リターナブルびんはP箱と一緒にないと流通できないものであり、P箱が返却されず不足している問題を解決することが非常に大切です。

さらに、容器包装リサイクル法では、リターナブルびんの収集方法を規定していないという現状もあり、すべての自治体が収集できるようになるには、かなりハードルが高いと思っています。

東京23区ではびん商が委託されびんを収集してリターナブルびんを抜き取っていますが、これは特別な事例で、びんを熟知したびん商だからこそ品質を保ちながらリターナブルびんを収集・選別しているのだと思います。

自治体におけるリターナブルびん収集が広がることは望ましいとは思いますが、私としては、昔ながらのびんを酒販店に戻す仕組みを取り戻してほしいと強く思っています。

ものがたりをデザインする 「三石 博」

パッケージデザイナー
三石 博氏



日本の焼酎の向こうに世界が見える「神の河」のボトル。
色と形にこだわった「ヌーベル月桂冠純米吟醸」のボトル。

ボトルデザイナーとしての原点は、薩摩酒造株式会社の「神の河」にあると思っています。「神の河」は麦焼酎ですが、焼酎を蒸留するためには蒸留器が必要です。その蒸留器は、一説によると紀元前3000年頃のメソポタミア文明で発明されたとされています。まさに日本の焼酎の向こうに世界が見える。そんな想いが「神の河」のボトルには込められています。

また、月桂冠株式会社の「ヌーベル月桂冠 純米吟醸」ですが、2001年に登場した「ヌーベル月桂冠」をさらに進化させたボトルです。こだわったのは色と形。江戸時代の流行色である璃寛茶（りかんちゃ）を使用し、磁器徳利の持つ柔らかな美しい形をガラスで表現しました。



▲薩摩酒造株式会社
「神の河」

大事なのはブランドを築き上げて商品を継続させること。
技術が前面に出ない自然に見て美しいびんを作りたい。

ボトルをデザインする上で大切なことは、オリジナリティとかが魅力を感じさせることだと思います。まず作れるとか作れないというところから入ると、大事なことを見失ってしまいます。一番

大事なのは、しっかりブランドを築き上げて、その商品を10年20年と継続させることだと思います。

ガラスびんを製造する技術は進化していて、特に日本の技術は進んでいると思うのですが、その技術がボトルデザインの前面に出てこないほうがいいように思います。こだわりのある形状や色調にするための難しい技術を説明しようとするデザインより、自然に見て美しいデザインがいい。そんなガラスびんを作りたいと思います。



▲月桂冠株式会社
「ヌーベル月桂冠純米吟醸」

Information お知らせ

川西市の国崎クリーンセンター「ゆめほたる」で、「びんを学ぼう」というテーマで幸事務局長が講演。

9月4日(日)に、兵庫県川西市の国崎クリーンセンター啓発施設「ゆめほたる」において開催された「ファミリーフリーマーケット」の同時開催イベントとして、「びんを学ぼう」というテーマで当協議会の幸事務局長が講演。家族連れや環境に興味のある方など、定員を上回る参加があり満席となりました。

講演の内容は、ガラスとガラスびんの歴史に始まり、ガラスびんの魅力とさらにガラスびんの3Rについて分かりやすく解説。びんのリサイクルの紹介では、昨年制作したムービー「大好き! ガラスびん 何度でも「びん to びん」リサイクル」を観ていただきました。



「3R推進団体連絡会」主催の「第11回容器包装3R推進フォーラム」を開催。

「3R推進団体連絡会」主催による「第11回容器包装3R推進フォーラムinにつぼり」が、11月11日(金)にホテルラングウッド4階日暮里サニーホールにて、「容器包装の3Rと循環資源」というテーマで開催されました。

福岡大学名誉教授/中央環境審議会会長 浅野 直人氏による基調講演「資源循環に関する日本の今後の政策の方向と容器包装リサイクル制度の課題」や経済産業省・環境省・農林水産省による「国からの報告」、さらに当協議会の会員企業である麒麟株式会社などによる3Rの取り組みの「事例報告」がありました。

パネルディスカッションでは、3R推進団体連絡会、事例報告者と会場参加者による活発な意見交換が行われました。



▲麒麟株式会社の事例報告



▲パネルディスカッション

